令和２年度

国立近現代建築資料館活動報告

令和２年度 国立近現代建築資料館 活動報告

Annual Activity Report of NAMA, 2020（Reiwa 2）fiscal year

文化庁国立近現代建築資料館

Ⅰ．資料の調査・保管等

1．各資料の作業

各資料について、次のとおり調査～保管までの業務（資料調査、資料受入、契約解約、返却、資料整理・研究、目録作成、デジタル撮影、燻蒸、修復、資料利用等）を行った。

(1) 坂倉準三建築設計資料

■ 概要

資料整理については、昨年度からの継続作業として、これまでに作成された目録データの公開を順次開始した。また資料の利用に伴い、一部の写真等資料についてデジタル化を行った。

■ 著作権譲渡契約の締結

元所員又は施主が所有していたもので当該所有者から直接寄贈を受け資料館所蔵となっている資料について、令和3年3月22日付けで坂倉準三の遺族と著作権の譲渡契約を締結した。

■ 資料整理・目録作成

昨年度寄贈資料の内容を反映した階層構造に従い、公開用目録の作成手順を更新し、東京事務所図面資料の目録整備を進めた。具体的には、閲覧等利用が申請されたもののうち主に東京事務所図面資料に関する既存の目録データ及び写真・箱資料のファイル目録を中心に、資料館共通フォーマットへの変更を行った。

■ 調査研究

昨年度寄贈資料に含まれる国立西洋美術館ポートフォリオ及び図面の調査を行った。ポートフォリオについては、国立西洋美術館が所蔵している版との比較を行うとともに、ル・コルビュジエ財団蔵の関係資料も参考に資料館所蔵資料について考察した。図面資料については、令和2年度収蔵品展「ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡」展での展示に伴い、当該資料の経緯について先行研究を踏まえて考察を行った。

(2) 駒田知彦資料

■ 資料の概要（「(1) 坂倉準三資料」と独立）

坂倉事務所の元所員であった駒田氏所蔵の資料については、神奈川県立近代美術館関連資料のほか、ファイル目録作成を進めた。

(3) 村田豊建築設計資料

■ 資料整理・目録作成

図面及びその他の資料整理を行った。具体的には筒番号25から48番までフラットニング、各資料への資料番号記載、及びファイルレベル及びアイテムレベルの目録作成を行った。

また、ファイル番号49番以降の図面以外の資料も約３箱の整理を終えた。

■ デジタル化

ファイル番号25から33までの基本画像（400 dpi）と閲覧用画像（200 dpi）を作成した。

(4) 吉阪隆正＋U研究室建築設計資料

■ 目録作成

図面及び紙資料の目録作成を実施した。具体的には資料番号を記載し、アイテムレベルの目録作成を行った。なお、ファイルレベルの番号は既に決められており、整理上変更する必要はないため、そのまま使用した。

(5) 大髙正人建築設計資料

■ 保存管理

過去の展覧会で使用した図面について収蔵場所の確認を行い、戻す作業を実施した。その過程で、保存容器のないものがあり、保存容器の製作も行った。併せて目録に収蔵場所を記入した。

(6) 木村俊彦構造設計資料

■ 資料調査・目録作成

資料整理・目録作成が完了し、資料の公開を開始した。

(7) 菊竹清訓建築設計資料

■ 概要

昨年度に寄贈された1960年代及び慰霊碑関連の図面資料について資料整理を継続して進めた。なお、令和3年1月に島根県立美術館で開催された展覧会「菊竹清訓　山陰と建築」への資料貸出及びその他利用等の申請があった資料を優先して目録作成を進めた。また1970年代前半の図面資料及び慰霊碑関連の文書等資料について、賃借契約を締結して、令和3年1月に資料館へ搬送し、寄贈手続きに向けた作業を開始した。

アドバイザリー・コミッティー（寄贈者、学識者、事務所関係者で構成）は、新型コロナウイルス感染症拡大により、委員が会する状態での開催が困難であったため、菊竹資料のアーカイブ化の進捗状況の報告及び資料整理等についての資料を送付し、それについて意見・助言等を受ける形での実施とした。

■ 委託事業等

当該資料の整理をより効率的かつ適切に行うため、資料整理にあたっては、1960年代図面資料は明るい建築計画、1970年代図面資料については有限会社ナスカへ委託、慰霊碑関連資料については、昭和女子大戸田譲氏へ資料整理協力を依頼した。

■ 資料整理

寄贈済み資料については目録作成を中心に実施した。借用資料については（株）情報建築から資料館へ搬入後、フラットニング及び資料番号の付与を中心に整理作業を進めた。なお慰霊碑関連資料についても、図面資料を中心にフラットニング、番号付与、目録作成作業を進めた。

■ 資料の修復

島根県立美術館への資料貸出しに伴い、島根県立武道館の図面資料2点（15-1015-21, 22）の修復を行った。

■ 菊竹清訓建築資料のアーカイブズ構築のためのアドバイザリー・コミッティー

資料：

(1) 令和2年度資料整理業務概要
(2) 今年度寄贈リスト・作品名称の確認
(3) 将来計画と今後の予定
(4) 令和元年度委託事業概要報告
(5) 今後のアーカイブズ公開について
(6) その他菊竹資料に関する活動（展覧会等）報告

■ デジタル化

寄贈された資料のうち、整理された資料の一部、パシフィックホテル茅ヶ崎及び佐渡グランドホテル等、約1,000点についてデジタル化を行った。

(8) 川添登資料

■ 資料確認・整理

令和2年11月2日付けで貸借契約を締結して資料館へ資料を搬送し、寄贈契約に向けて、段ボール箱に収納された資料整理、目録作成を進めた。

(9) 岸田日出刀資料

■ 資料整理

昭和35（1960）年東京オリンピック施設委員長としての視察旅行時の日記帳の翻刻を実施した。

■ 保存、管理

図面のうち、A0以下のものを中性紙に包みマップケースに入れ替えた。

(10) 高橋靚一・第一工房資料

■ 資料調査

寄贈に向けた調査のため令和2年6月24日付けで貸借契約を締結するとともに、WGを開催し、前年度策定した選定基準をもとに、寄贈を優先すべき「コア作品」を選定し、収蔵に向けた資料確認を行った。

■ 資料整理

資料整理・確認のためのフラットニング、ナンバリング、ファイルリスト作成を行った。

(11) 前川國男建築設計資料

■ 寄贈契約

前川建築設計事務所は現在も活動しており、現存する作品については維持管理や増改築等のために当初の建築資料を使用することから、コンペ等で実現しなかった作品及び現存しない作品に関する建築資料の寄贈を順次受けることとなっている。今年度は、令和2年11月9日付けで寄贈契約（第2回）を締結し、蛇の目ミシンビル、晴海団地高層アパート等の図面資料の寄贈を受けた。

■ 資料整理

寄贈を受けた資料について、番号付与及び目録作成作業を開始した。

(12) 原広司＋アトリエ・ファイ建築設計資料

■ 概要

令和2年6月3日付けの借用依頼により、6月18日に資料館へ141件の資料を搬入し、令和3年2月にアイテムの数え上げを完了した。資料内容は主に図面。アトリエ・ファイ建築研究所との協議により、同年3月2日付けで15,140点を対象とした寄贈契約を締結した。

■ 資料調査

寄贈契約締結に向けたアイテム数の確認を行うとともに、資料の状態を確認し、カビなどが見られる場合は隔離を行った。

(13) ブルーノ・タウト関連資料

■ 資料調査

所有者であるシュパイデル氏との貸借契約に基づき、令和2年10月9日に資料を預かっている工学院大学教授の鈴木敏彦氏から当該資料を引き取った。

■ 資料受け入れに向けた手続き

令和3年3月26日開催の第17回運営委員会に受入資料概要及び詳細を提出し、資料受け入れについて承認された。

■ 資料整理

令和2年3月、引取資料の数量を確認し、ファイル目録を作成した。

(14) 渡辺仁資料

■ 追加資料の寄贈契約

遺族から寄付申し出があった資料のうち、手続きが進んでいなかった段ボール一箱分の調査と目録作成を行い、令和2年11月24日付けで寄贈契約を締結した。

■ 目録

既存目録を「最終目録」に合わせて書き換えた。

(15) 渡辺義雄撮影西洋美術館・東京文化会館写真資料

■ 概要

資料館が借用していた本資料の一部を渡辺義雄氏撮影の写真を所蔵している日本写真家協会日本写真保存センターに保管してもらうことにして、資料所有者の了承を得た上、令和2年9月29日に資料館から上記センターに直接写真を引き渡した。

(16) 平田重雄資料

■ 保存管理

資料の形状と状態を見て、次年度からの実施方針として、一部はマップケースではなく中性紙箱などを使用して保管することを決定した。

2. 新規受入資料の概要

(1) 木村俊彦構造設計資料

木村俊彦は、大正15(1926)年香川県高松市に生まれ、昭和25(1950)年東京大学第二工学部を卒業後、前川國男建築事務所入所、昭和27(1952)年横山構造設計事務所への移籍を経て、昭和39(1964)年に独立、木村俊彦構造設計事務所を設立した。

本資料群は、木村が横山構造設計事務所に在籍していた昭和29(1954)年頃から木村の死去によって事務所が閉鎖されるまでに作成された構造設計図書、構造計算書等のプロジェクト、構造設計に伴うプログラミング、文書、写真及びスケッチ等の資料並びに構造家倶楽部設立等木村が個人として関わった資料からなる。数多くの著名な建築家による建築物及び国内外で高い評価を得ている建築の構造設計を担った木村俊彦の構造設計思想を示す証跡であり、木村が構造家として活動を行った全期間を含む包括的な資料群である。

(2) 前川國男建築設計資料(第2回)

前川國男は、明治38(1905)年新潟市に生まれ、昭和3(1928)年東京大学工学部建築学科卒業と同時にパリへ赴き、ル・コルビュジエのアトリエで学び帰国後、昭和5(1930)年にレーモンド事務所を経て、昭和10(1935)年に前川國男建築設計事務所を設立した。同事務所には、丹下健三、大高正人、木村俊彦等も在籍していた。

本資料群は、前川國男建築設計事務所が現在も存続し、前川作品の修理、保存、改築等の業務を継続していることから、現用でない資料について段階的に寄贈されることになったものであり、今回はその第2回である。

日本建築学会賞受賞した蛇の目ミシン工業株式会社、日本住宅公団晴海団地高層アパートはじめとした社会的に高い評価を得た建築の資料や、上海華興商業総合住宅、日本住宅公団の一連の住宅等、戦前から戦後の集合住宅の変遷をたどることのできる図面資料、また、トロント市庁舎コンペ、レオポルドビルコンペ、NHKテレビセンターコンペ、アムステルダム市庁舎コンペ等、その後の前川建築のデザインへ影響を与えたコンペ案の図面資料等が含まれている。

(3) 角田栄資料

角田栄は、大正2(1913)年3月、京都府与謝郡宮津町に生まれ、京都帝国大学工学部建築学科にて坂静雄の指導受けた。大蔵省営繕管財局、名古屋帝国大学事務嘱託などを経て、戦後、アジア競技大会に合わせて建設された国立陸上競技場と国立競技場付属テニスコートの設計を建設省関東地方建設局営繕部第一課長として担当した。建築家片山光生とともに国立競技場を設計した中心的人物である。

本資料群は、国立競技場等のスケッチ帳、東京オリン

ピック海外視察時の日記帳、国立競技場関連の書籍、ビルマでの自らの戦史を綴った文章やスケッチなどからなる。多くは個人資料であるが、国立競技場建設のための海外視察時の日誌や写真アルバム、聖火台、競技場内の装飾、自邸のエスキス等が描かれているスケッチブック、学生時代の写真アルバム、官位・各種委員等の任命・委嘱状、大蔵省営繕課の職員名簿といった資料は一次資料としての史料的価値が高いと思われる。

(4) ヴァスムート社所有吉田著作関連資料

吉田鉄郎は、明治27（1894）年富山県東礪波郡福野町に生まれ、大正8（1919）年に東京帝国大学を卒業後、逓信省営繕課に入省、昭和20（1945）年の退職まで多くの逓信省の建築を設計した。代表作に東京中央郵便局、大阪中央郵便局などがある。その他、日本の建築文化を紹介する著作を海外で刊行。「日本の住宅」、「日本の建築」（以上、独語）、「日本の住宅と庭園」（英語）などの著作がある。

本資料群は、吉田によるドイツ語の著作„Das japanische Wohnhaus（日本の住宅）"（第2版）、„Japanesche Architektur（日本の建築）"、„Der japanische Garten（日本の庭園）"に関する写真・図版原稿やスケッチ（レイアウト指示書）で、吉田が逝去直前の昭和31（1956）年までに作成し、ドイツのヴァスムート社に送付したものを、同社が保管していたものである。

原稿及び吉田がページレイアウトを指示したスケッチ、並びに写真・図版に記されたキャプションやコピーライトの記述などは、吉田による日本の住宅や建築への理解を示す貴重な資料である。また吉田が生涯を通じて行ってきた設計活動との関連を考えるための研究資料としても、利用可能性を持つものである。

(5) 原広司＋アトリエ・ファイ建築設計資料

原広司は、昭和11（1936）年神奈川県川崎市に生まれ、昭和34（1959）年に東京大学工学部建建築学科を卒業後、昭和39（1964）年に同大学大学院博士課程修了、同年より東洋大学所助教授を経て昭和44（1969）年より東京大学で教育・研究を行いながら、RAS建築研究所（昭和36〔1961〕年から昭和43〔1968〕年）、アトリエ・ファイ建築研究所（昭和45〔1970〕年から平成10〔1998〕年）、原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所（平成11〔1999〕～）を拠点に設計活動を行った建建築家である。1970年代に住宅建築で注目を集め、昭和61（1986）年に田崎美術館で日本建築学会賞を受賞した。1990年代以降は梅田スカイビルや京都駅ビルなどの大規模な建築が知られる。東京大学での研究として実施された世界の集落調査や、著作『空間〈機能から様相へ〉』（サントリー学芸賞受賞）でも知られる。

本資料群は、主として原広司がRAS建築研究所での活動及びアトリエ・ファイ建築研究所との協同において作成された建築設計図等からなる。

資料群に含まれる属性は、会社記録（工事請負契約書の頭部分のコピー）とプロジェクト記録（建築設計の設計図等）の2つに大別される。

Ⅱ．展示・教育普及

1. 展覧会

令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大による影響から当初予定していた丹下健三展の開催を延期したことに伴い、資料館収蔵資料を活用した収蔵品展として「ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡」を開催した。また、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として実施する「日本博」の主催・共催型プロジェクトとして東京国立博物館、国立科学博物館及び資料館の3館共同で開催する「日本のたてもの ―自然素材を活かす伝統の技と知恵―」の一環として「工匠と近代化 ―大工技術の継承と展開―」を開催した。

(1)「ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡」

■ 展覧会

会期：令和2年10月1日（木）～令和2年11月15日（日）
（46日間）

来場者総数：3,769人
（合同庁舎正門：501人、旧岩崎庭園：3,268人）

一日平均来場者数：81.9人

主催：文化庁

協力：公益財団法人東京都公園協会

企画：文化庁 国立近現代建築資料館

館内担当者：川向正人（当館主任建築資料調査官・東京理科大学名誉教授）
遠藤康一（研究補佐員）
木下紗耶子（研究補佐員）

■ 内覧会

新型コロナウイルス感染拡大対策のため開催せず。

■ 刊行物

体裁・部数　ポスター：B2縦　500部
チラシ：A4縦両面　2,000部

図録：B5横・36ページ・無料配布
3,000部

■ メディア掲載

・Tokyo Art Beat（展覧会案内を掲載）
・KENCHIKU（展覧会案内を掲載）

■ 参照情報

・オーラルヒストリー　青木淳氏／原広司氏（Ⅲ．1.（1）参照）
・特設ウェブサイト（http://nama-museums.jp/）
オーラルヒストリー映像を公開。

(2)「工匠と近代化 ―大工技術の継承と展開―」

■ 展覧会

会期：令和2年12月10日（木）～令和3年2月19日（金）
（令和2年12月29日（火）～令和3年1月3日（日）を除く50日間）
※新型コロナウイルス感染拡大による都立旧岩崎邸庭園の臨時休園に伴い、令和3年1月9日（土）以降の土日祝日を休館としたため、当初の最終日令和3年2月21日（日）及び会期日数68日間から変更となった。
入館者数：3,348人（合同庁舎正門：2,491人、旧岩崎庭園：857人）
一日平均来場者数：67.0人
主催：文化庁
特別協力：キヤノン、JR東日本、日本たばこ産業、三井不動産、三菱地所、明治ホールディングス、公益財団法人東京都公園協会
協賛：清水建設、髙島屋、竹中工務店、三井住友銀行、三菱商事
協力：国立歴史民俗博物館、金沢工業大学

■ 実行委員会

a. 委員
池上重康（北海道大学助教）
清水隆宏（岐阜工業高等専門学校准教授）
永井康雄（山形大学教授）
山崎幹泰（金沢工業大学教授）
川向正人（当館主任建築資料調査官）

b. 館内担当者
木下紗耶子（研究補佐員）
小池周子（研究補佐員）
寺内朋子（研究補佐員）

c. 開催状況
令和2年2月より同年10月まで計5回の定例、ワーキングとして開催。

■ プレスカンファレンス

新型コロナウイルス対策として内覧会は開催せず、プレスのみに事前公開を行った。
実施日：令和2年12月9日（水）14:00～16:30

■ ギャラリートーク

新型コロナウイルス感染対策のため開催せず。

■ 関連イベント：オンライン配信

ニコニコ美術館運営の下、オンラインでのギャラリーツアーを開催。
日時：令和3年1月12日（火）18:30～
進行：橋本麻里／モデレーター：川向正人
オンライン視聴者・アーカイブ配信数：
31,027回 / コメント数：17,767件

■ 刊行物

体裁・部数　ポスター：B2縦　500部
チラシ：A4縦両面　30,000部
図録：B5横・64ページ・無料配布
3,000部

■ メディア掲載

新聞
・読売新聞　令和2年12月6日　朝刊（1面、30面）
・毎日新聞　令和3年1月15日　富山版
・毎日新聞　令和3年1月20日　夕刊

雑誌
・『月刊文化財』　令和2年12月号
・『新建築』　2021年1月号
・『GENROQ』　2021年2月号

WEB、TV
・ジャパンデザインネット　令和2年12月11日
・カーサブルータス web　令和2年12月25日
・ペンオンライン　令和3年1月5日
・ファッションプレス　令和3年1月8日
・インターネットミュージアム　令和3年1月8日
・ニコニコ美術館　令和3年1月12日　18:30～
・日曜美術館アートシーン　令和3年1月17日

(3) 展覧会準備

令和2年夏季開催を延期した「丹下健三1938–1970 戦前からオリンピック・万博まで」展について、開催に向けたポータルサイトの立ち上げ準備を進めた。同展の開催は関係者と調整を行い、会期を令和3年7月21日（水）から10月10日（日）とすることにした。

■ ワーキンググループ

豊川斎赫（千葉大学大学院准教授）、勝原基貴（千葉大学特任研究員）

2. 資料提供

(1) 現物（貸出先：貸出資料　用途）

・島根県立美術館：菊竹清訓資料より図面25点　展覧会「菊竹清訓　山陰と建築」

(2) 画像（貸出先：貸出資料　用途）

・企業：坂倉準三資料群より3点　NHK BS プレミアム「アナザーストーリーズ世界遺産スペシャル」放送
・個人：吉阪隆正＋アトリエ U 研究室資料8点、大高正人建築設計資料1点　研究資料
・団体：大高正人資料より63点　建物改修の資料
・個人：坂倉準三資料群より2点　論文執筆
・個人：大高正人資料より3点　著書掲載
・企業：坂倉準三資料群より3点　菊竹清訓資料より1点　書籍『「奇跡」と呼ばれた日本の名作住宅』に写真掲載
・倉敷市立美術館：丹下都市建築設計所蔵マイクロフィルムより40点　国登録有形文化財認定に係る建築紹介
・企業：大高正人資料より1点　ケーブルネット296「建築遺産」への写真放映
・企業：渡辺仁資料より1点　テレビドラマ「名建築で昼食を SP 横浜編」に写真掲載
・企業：吉阪隆正資料より6点　TOTO 通信（2021年春号）及び TOTO ウェブサイトに掲載
・企業：菊竹清訓資料より15点　島根県立美術館菊竹清訓展の書籍に掲載
・企業：渡辺仁資料より1点　テレビ東京「新美の巨人たち」に写真放映
・企業：菊竹清訓資料より2点　島根県立美術館菊竹清訓展の書籍に掲載
・団体：大高正人資料より101点　建物改修の資料
・企業：大高正人資料より1点　ケーブルネット296「建築遺産」への写真放映

(3) 資料閲覧及び複写の提供

資料閲覧及び複写の提供実績の概要は、以下のとおりである。

ア．閲覧実施件数及び閲覧点数の実績

＊実施件数：22件
＊閲覧に供した資料点数：76ファイル、1568点
＊資料群別の実施件数
・坂倉準三建築設計資料：9件
・丹下都市建築設計所蔵マイクロフィルム：3件
・村田豊建築設計資料：1件
・吉阪隆正＋ U 研究室資料：2件
・大高正人建築設計資料：3件
・菊竹清訓建築設計資料：3件
・吉田鉄郎建築設計資料：2件

イ．複写の提供実績

＊提供件数：9件
＊提供点数：599点

3. 第2回近現代建築アーカイブズ講習会

近現代の建築資料を所蔵する組織の学芸担当者等を対象とし、近現代建築資料における収集、整理、保存及び利用等に関する必要な専門的知識と技能の習得を目的として開催した。

開催日：令和2年11月12日（木）、13日（金）
会場：湯島地方合同庁舎会議室・資料館会議室及びオンライン受講　※オンライン受講は12日のみ
受講者数：来館12名、オンライン44名
講習内容：

1日目（11月12日（木））

1. 近現代建築アーカイブズの概要
   講師：齋藤歩（京都大学総合博物館特定助教）
2. アーカイブズの歴史・アーキビストの使命と役割
   講師：森本祥子（東京大学文書館准教授）
3. 国立近現代建築資料館活動報告
4. 国立近現代建築資料館への寄贈という選択と寄贈後の経験
   講師：株式会社坂倉建築研究所
5. 企業アーカイブズの事例と課題について
   講師：畑田尚子（清水建設株式会社コーポレート企画室コーポレート・コミュニケーション部主任）

2日目（11月13日（金））

1. 近現代建築資料における紙資料の取り扱いと保存について
   講師：安田智子（東京修復保存センター取締役ペーパーコンサバター）
2. 建築資料デジタル化の効用と実際
   講師：田良島哲（国立近現代建築資料館 主任建築資料調査官）

Ⅲ．情報収集

1．オーラルヒストリー

「ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡」展関連

本展覧会の開催にあたり、ミュージアム建築を多数手掛けてきた青木淳（昭和31〔1956〕–）と原広司（昭和11〔1936〕–）にインタビューを行い、展示会場とウェブサイトにて公開した。

両者にインタビューを依頼した理由は次のようなものであった。第一に、時代を画する特色あるミュージアム建築を設計していること。第二に両者の仕事および言葉を記録することが、現代ないし将来のミュージアム建築の在り方を考察するうえで重要な参照項になりうると考えたからであった。

(1) 青木淳

収録日：令和2年8月27日
収録対象：青木淳
聞き手：川向正人
記録時間：約21分
収録場所：文化庁国立近現代建築資料館

青木が携わったミュージアム建築は潟博物館（平成9〔1997〕）や青森県立美術館（平成18〔2006〕）などが知られる。また京都市京セラ美術館の改修・リニューアルオープンに伴い、青木は令和2（2020）年に館長に就任した。インタビューでは、建築家として、そしてコロナ禍の影響を受けながらの出発となった館長としての両面から話を聞くことができた。

インタビューにおいて、青木は、明治以降の日本のミュージアム施設の歴史を振り返り、一時的な見世物としての陳列ではなく、コレクションを核とした展示活動に立ち戻ることの重要性を指摘した。そのうえで、21世紀のミュージアムとして、モノを作り活動する現場としての在り方を提言し、「モノを作る猿」としての人間の始原的な姿に働きかけることが、ミュージアムの存在意義を確かなものにしていくとする。そのようなミュージアムは、完成した作品を見る場としての静的なものではなく、今日的な視点から継続的に働きかけることのできる現在進行形の場でもある。また、鑑賞体験でも決められた動線をなぞることとともに、歩く楽しみのなかに作品に出くわすという「散歩道を作る」鑑賞もまたミュージアムの魅力である。

作ること、そして散歩することの楽しみに開かれた青木の構想するミュージアムは、動員数だけを指標とするのではない、人々の多様な関わり方を受け止め、そして活性化するものである。建築を設計することと、建築を人間が活動するための場ないし道具として活かしていくことを連続的に捉える視点性のなかから、新しいミュージアムの在り方が目指されている。

(2) 原広司

収録日：令和2年8月31日
収録対象：青木淳
聞き手：川向正人
記録時間：約17分
収録場所：文化庁国立近現代建築資料館

原は、末田美術館、田崎美術館、飯田市美術博物館の設計過程について、施主や技術的な協力者との協働や地形・気候・展示作品との関わりから、建築を構想し成立させていく過程を語った。これらのミュージアム建築は原の70年代の住宅建築群と90年代の大規模なプロジェクトとの、時期および規模の中間に位置しており〈様相〉の概念が組み立てられる時期と重なる。

末田美術館は住宅兼アトリエ、展示施設であり、集落調査や自邸の設計からの延長として設計された。田崎美術館では田崎廣助が描いた山の絵画を自然光の中で見せることを意図した。また、モダニズム建築が前提とする均質空間に対して、空間の現象全体を「様相」ととらえ、一期一会のものとして現れる建築を設計しようとした。飯田市美術博物館は、伊那谷から見る山の形やそこにかかる雲の形象を踏襲して設計された。原は同敷地内への柳田國男館の移築にも尽力し、日夏耿之介記念館を含めた展示施設は小道によって接続され、地域の歴史や芸術・自然科学を包括する一帯が作られた。

原は、ミュージアム建築を通じて、土地や収蔵品と密接に結び付きながら構想される建築の在り方を模索した。ミュージアムを訪れる経験は、展示室内のみで完結されず、建築の内外を歩き、その時間のなかで体験される気候や風景の様々な変化とともにある。自然現象と応答する建築においては、作品鑑賞の経験が何度でも刷新される可能性をも設計することが試みられている。作ること、そして散歩することの楽しみに開かれた青木の構想するミュージアムは、動員数だけを指標とするのではない、人々の多様な関わり方を受け止め、そして活性化するものである。建築を設計することと、建築を人間が活動するための場ないし道具として活かしていくことを連続的に捉える視点性のなかから、新しい

ミュージアムの在り方が目指されている。

Ⅳ. 調査研究等

我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査

1. 実施概要

1990年代以降は建築資料の電子化が進み、このような電子化された建築資料をいかにアーカイブとして構築するか、そして適切に保管、活用していくかといった方策を見いだすことが今後の課題として認識されている。

本調査は他の建築資料よりもその資料的特性等から、先行して電子化が進んだ構造資料を対象として、これまで資料館が行ってきた3か年の構造家の概要資料調査の成果をふまえつつ、複数の存命建築家の資料について調査し、アーカイブ構築のための課題を整理し、ネットワーク化を含む構造資料の電子化継承にかかわるさまざまな可能性について検討することを目的とした。方法としては、存命建築家の構造資料とその保管の実態について明らかにし、現状の問題点、課題等について検討を行った。

2. 実施の記録

次のとおりワーキンググループによる調査を実施し、その成果を「我が国の近現代建築に関わる存命建築家の構造資料の電子化継承に関する調査」報告書としてとりまとめた。

主査：竹内徹（日本構造家倶楽部）
委員：伊藤潤一郎、佐々木睦朗、金田勝徳、金箱温春、多田脩二、中田捷夫、原田公明、満田衛資、森部康司（日本構造家倶楽部）、小澤雄樹（芝浦工業大学）、川口健一（東京大学）、安藤顕祐（日建設計）、浜田英明、藤本貴子（法政大学）
顧問：難波和彦
協力：加藤道夫、加藤直子（資料館）

第1回：令和2年12月23日
場所：オンライン開催
打合せ内容：
・これまでの経緯、今年度調査の目的と実施体制等の確認
・調査対象候補者及び調査方法の検討

第2回：令和3年1月21日
場所：オンライン開催
打合せ内容：
・調査の中間報告
・報告書内容についての協議

第3回：令和3年2月24日
場所：オンライン開催
打合せ内容：
・調査の報告
・報告書内容についての協議

第4回：令和3年3月22日
場所：オンライン開催
打合せ内容：
・最終報告書（案）の確認

3. 調査結果概要

本調査では、まずこれまで3か年の構造家の概要資料調査の成果をふまえ、存命建築家を対象として、代表的な建築物、構造解析方法、構法とその施工法リストを作成した。それをもとに調査対象とする構造家を選定し、電子化とネットワーク化を視野に入れた資料継承の方法等の実態について調査を行い、その結果を体系的にまとめた。具体的には、構造家の事務所における構造資料の保存状況の概略を調査によって把握するとともに、国内外の大手組織設計事務所におけるデジタルデータの管理、及びアーカイブ手法についてヒアリング調査を実施した。

調査の結果、構造家の資料の保存は、管理組織がない場合は遺族により資料整理が行われるが、資料の分類や特定の難しさ等から破棄される事例もみられたこと、資料が保存されていても公開の際に遺族等所有者の同意を得ることが困難な場合があることが明らかになった。いわゆるアトリエ系の小規模な事務所では資料のデジタル化や版権の整理も未着手である場合も多くみられる一方で、組織設計事務所の中には、構造資料をプロジェクト遂行段階より分類して共有データとして管理し、映像・画像データも保存の際に版権等を整理し組織名で利用できるようにするなど、担当者によらず把握が可能となっている事例もみられた。

Ⅴ．委員会

1．運営委員会

令和2年度委員

（◎は委員長、○は委員長代理、五十音順　敬称略）

加藤雅久（居住技術研究所主宰）、隈研吾（東京大学特別教授・名誉教授）、近角真一（日本建築士会連合会会長）、◎難波和彦（東京大学名誉教授）、○山崎幹泰（金沢工業大学教授）、山名善之（東京理科大学教授）、渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授）

開催状況

第15回：令和2年9月14日　※Web会議

〔主な議題〕

・資料の受入について

吉田鉄郎資料

・展覧会の開催について

①「丹下健三 1938–1970　戦前からオリンピック・万博まで」展の延期

②令和2年度収蔵品展「ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡」

第16回：令和2年9月23日～9月30日　※メール審議

〔主な議題〕

・展覧会の開催について

令和2年度収蔵品展「ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡」

第17回：令和3年3月26日　※Web会議

〔主な議題〕

・資料の受入について

・展覧会の開催について

①「丹下健三 1938–1970 戦前からオリンピック・万博まで」展の開催時期

②令和3年度収蔵品展

・資料公開に関する基準の策定について

2．小委員会

(1) 収集小委員会

令和2年度委員（◎は委員長、五十音順　敬称略）

加藤諭（東北大学准教授）、◎加藤雅久（居住技術研究所主宰）、角田真弓（東京大学技術専門職員）、藤木竜也（千葉工業大学准教授）、山崎幹泰（金沢工業大学教授）

開催状況

第15回：令和3年1月29日　※Web会議

〔主な議題〕

・資料の受入れについて

(2) 企画小委員会

令和2年度委員（◎は委員長、五十音順　敬称略）

太田泰人（前女子美術大学教授）、大村理恵子（パナソニック汐留美術館学芸員）、国広ジョージ（国士館大学教授）、◎難波和彦（東京大学名誉教授）、前田尚武（京都市京セラ美術館企画推進ディレクター）

開催状況

第14回：令和2年9月18日

〔主な議題〕

・「丹下健三 1938–1970　戦前からオリンピック・万博まで」展の延期について

・令和2年度収蔵品展「ミュージアム1940年代－1980年代：始原からの軌跡」について

(3) 情報小委員会

令和2年度委員（◎は委員長、五十音順　敬称略）

後藤真（国立歴史民俗博物館准教授）、齋藤歩（京都大学総合博物館特定助教）、永崎研宣（人文情報学研究所主席研究員）、森本祥子（東京大学文書館准教授）、◎渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授）

開催状況

第11回：令和3年2月1日

〔主な議題〕

・国立近現代建築資料館　資料公開業務に関する基準の策定について

Ⅵ．運営

1．広報・広聴

(1) 資料館ウェブサイト

ウェブサイトの保守管理を（株）ナカヨに委託して運用した。展覧会の開催案内、チラシ、図録などのデータを掲載したほか、新型コロナウイルス感染症のまん延にともなう利用の制限等、臨時の措置に関する情報を、周知のため適宜掲載した。

開発を進めてきた収蔵資料検索システムについて、収蔵資料のデータを順次投入しウェブ上での公開の準備を進めた。令和2年度末には公開可能な状態に移行し、表示や使い勝手の確認を行っている。システム管理は（株）VVVに委託している。

(2) 文京ミューズフェスタ2020

令和2年12月15日（火）～19日（日）にギャラリーシビック（文京シビックセンター1階）にて開催された「文京ミューズフェスタ2020」（主催：文京区、文の京

ミュージアムネットワーク）に参加した。今回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため対面案内が制限されたことから、日本博の一環として東京国立博物館、国立科学博物館及び資料館の3館で開催する「日本のたてもの」展の共通ポスターと資料館を会場として開催中の「工匠と近代化 ―大工技術の継承と展開―」展のポスターを掲示し、区民ら来場者に広報を図った。

(3) 上野文化の杜

上野文化の杜のポータルサイトで施設概要や開催する展覧会の情報を発信した。なお、従来は上野文化の杜新構想実行委員会が発行する UENO WELCOME PASSPORT（上野地区文化施設共通入場券）に施設情報を掲載し、当該パスポート持参者に特製ポストカードを進呈することによって広報を図っていたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、今年度は発行が見合わされた。

(4) アンケート調査

令和2年度収蔵品展「ミュージアム 1940年代－1980年代：始原からの軌跡」、秋季展「工匠と近代化 ―大工技術の継承と展開―」の来館者に対して、展覧会の評価等に関するアンケート調査（任意）を実施した。

Ⅶ. 予算

令和2年度予算額　114,050千円

Ⅷ. 組織

令和2年度職員名簿

館長　清水　幹治（文化庁企画調整課長）
館長補佐　中島　充伸
（文化庁企画調整課課長補佐）
副館長　浅田　泰司

【研究系】

主任建築資料調査官（収集担当）　加藤　道夫
主任建築資料調査官（企画担当）　川向　正人
主任建築資料調査官（情報担当）　田良島　哲
研究補佐員　遠藤　康一（R2.9.30まで）
研究補佐員　加藤　直子
研究補佐員　木下　紗耶子
研究補佐員　小池　周子（R2.12.1から）
研究補佐員　寺内　朋子
研究補佐員　飛田　ちづる
文化財調査官　井川　博文（文化庁文化財第二課
（建造物）調査部門調査官）

【事務系】

事務室長　浅田　泰司　※副館長兼務
専門職　山口　俊浩　※建築資料調査官兼務
事務補佐員　佐藤　知美

Ⅸ. 年譜

令和2（2020）年

4月

清水幹治館長（文化庁企画調整課長）就任（1日）

6月

「木村俊彦構造設計資料」寄贈契約締結（5日）

9月

国立近現代建築資料館運営委員会（第15回）（14日）
※ Web 会議
国立近現代建築資料館運営委員会企画小委員会（第14回）（18日）　※ Web 会議
「角田栄資料」寄贈契約締結（23日）
国立近現代建築資料館運営委員会（第16回）（23～30日）　※メール審議

10月

令和2年度収蔵品展「ミュージアム 1940年代－1980年代：始原からの軌跡」（1日～11月15日）

11月

「前川國男建築設計資料（第2回）」寄贈契約締結（9日）
近現代建築アーカイブズ講習会（第2回）（12～13日）

12月

令和2年度秋展「工匠と近代化 ―大工技術の継承と展開―」（10日～令和3年2月19日）
※旧岩崎邸庭園の臨時休園に伴い、当初最終日2月21日から変更

令和3（2021）年

1月

国立近現代建築資料館運営委員会収集小委員会（第15回）（29日）　※ Web 会議

2月

国立近現代建築資料館運営委員会情報小委員会（第11回）（1日）　※ Web 会議
高橋ひなこ文部科学副大臣「工匠と近代化 ―大工技術の継承と展開―」展視察（8日）

3月

「原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所 資料」寄贈契約締

結（2日）
「吉田鉄郎著作関連資料（ヴァスムート氏旧蔵）」寄贈契約締結（16日）
「坂倉準三建築設計資料」著作権譲渡契約締結（22日）
※元所員又は施主が所有していたもので、当該所有者から直接寄贈を受け資料館所蔵となっていた資料が対象
国立近現代建築資料館運営委員会（第17回）（26日）
※ Web 会議